

連珠っておもしろい

九段 河村典彦

●第34回●

A級リーグ自戦記詳細

新年明けましておめでとうございます。本年もどうぞよろしく願います。

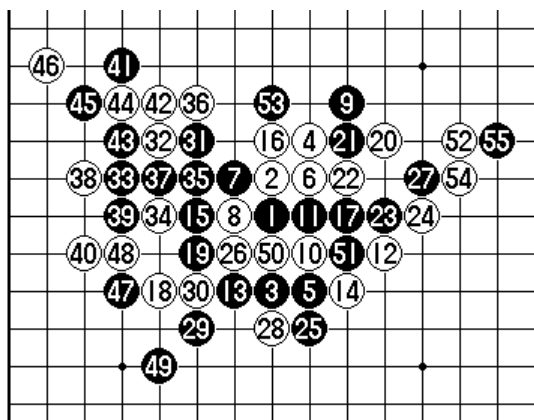
先日テレビを見ていたら、元名人の西山さんが、「正倉院典の解説」ということで出演されていた。知っている人が出ているというところで嬉しくなり、懐かしい思いで見ている。

さて、連珠世界一月号に自戦記が載るようなので、今回はその補足も兼ね、ダブル解説でA級の話をしてみよう。珠友に載せる局はずばり第一局の岡部戦である。これは少々解説が必要なのでちようどよい。

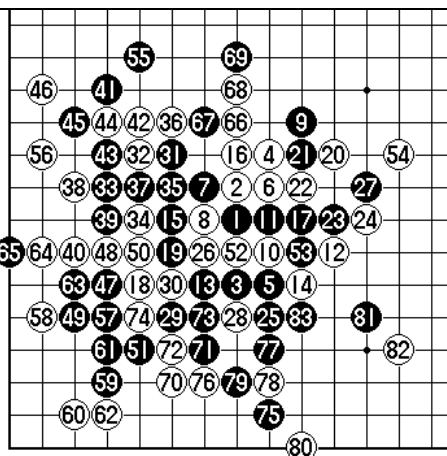
もともとの話は、瑞星の55手定石からの変化である。とは言うものの、55手定石って何？という人もおられるので、まずはそこか

ら説明しよう。

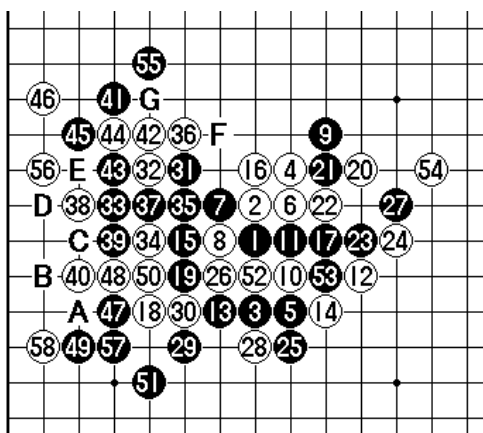
瑞星で白12の作戦に、黒13から15は、もともとは奈良さんが打ち始めたもので、対して白の作戦は、紆余曲折あったものの、白16から付いて行くことで定着している。すると黒も31、33と攻める事になり、黒41から四ノビをしまくって黒53に止めて置く手が有力となる。第9回世界戦で黒55手



「定石」と呼ばれているのだが、黒53までの「53手定石」が一番素直な表現だろう。「瑞星は満局」と外国勢が主張している根拠でもある。この定石に風穴を開ける局が第10回世界戦で現れた。譜はスウェーデンのカーソン（黒）対エストニアのタイムラ（白）である。元世界チャンピオン相手に臆することなく挑んだのであるが、黒63から強引に攻め、黒83まで白を受け無しに追い込んでいく。

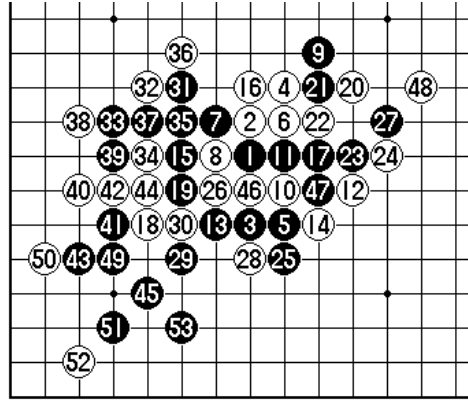


今から見ると白72が敗



着で、外止めで受かっていた。この譜の意義を説明してみよう。実は白58と止めた時、白にA、Dの四追いが残っているのである。黒55を打たなくても、A E F 55 Gという四追いが残っている。つまり、白58の時点で黒は後手を引いてしまっているのである。しかし、カーソンは一旦四ノビで止められるが、黒63と踏み込んでいったのである。そこがエライ！という訳である。

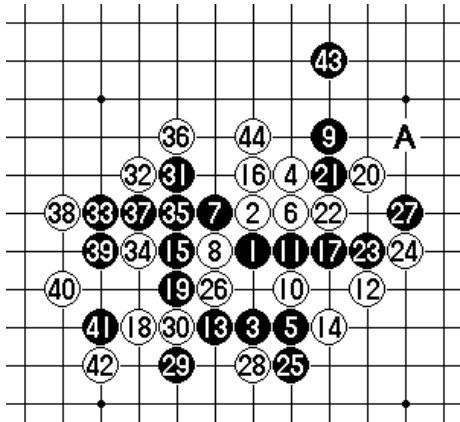
で、ここからが作戦であるが、つまり白58が先手にならないければ黒が勝てるんじゃない？という発想が残るのは、黒が四ノビを多く



したからなので、単純に41と打ってみるとどうなるか？調べた所、白50が四追い含みにならないので、例えば黒53まで打ってみると止まりそうにない。「え、これで勝ち？瑞星の歴史が変わる！」と喜んだのも束の間、当然白は42で外止め

するよなるとわかり、がつくり。

しかし、ここであきらめないのが根性である。「待てよ、白42をわざと外止めさせれば何かいい事があるんじゃないか？」と必死に探してみた。すると、黒は呼手が打てる事がわかった。黒41を打たないと、白から41に打たれ勝たれてしまう。そこで黒43に打ってどうか？と調べたのだが、白44あたりにでも打たれる



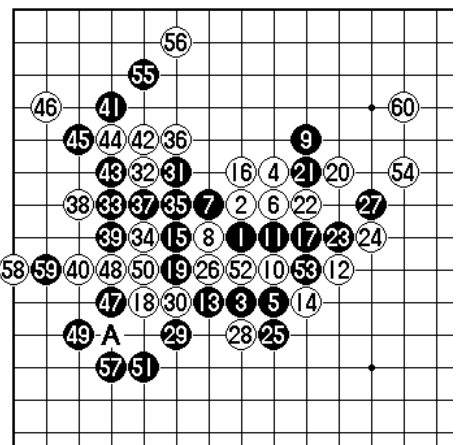
と、白の勢力が強くてなか

なか勝ちには至らない。結局、黒から44に止める手が最善と判断し、それじゃあつまらない、と研究を打ち切っていた。

ところが、A級リーグ第一局で岡部君に瑞星を打たれた時、「確か黒有利の研究をしていたなあ」と勝手に脳で変換されており、この手を打つ事になった。予想通り黒41を見た途端、長考に沈んだ。しかし、当然

の白42を受けて読み直してみると、やっぱり黒が勝てない。その場でひねり出したAの一着はなかなか良い手だったが、勝ちには至らなかった。その後の反撃で冷や汗をかいたが、結果はやはり満局だった。同じ満局でも、その意義を汲み取ってもらいたいと思うのだが、この譜を見た外国勢は果たして汲み取ってくれたらどうか？

ちなみに、第3局の畑戦でもこの形を打つ事になっ



たのだが、この一局がいい訓練になったようで、黒が57と攻めた時、白58の四ノビ一本でA点を四三々禁として先手を取り、白60に回って白勝ちとなつていいる。これも研究の副産物と考えれば、勝ちがない研究することも決して無駄ではない。同じ局面を見ていても、どう感じるかによってその後の研究は違ってくる。研究とは単に石を置くだけでは重要なのである。